

今(土)まじめに倫理考がすこの世には「雜草」はない

## 今週の 倫理

山野草はスレーブ...とか「ばよばよ」人向に例へては「リケン」など  
空んな人から、て「」のせだ、「さんな人が」「」人向社会が  
成り立つるやうのかば。草を過ふ  
7月のテーマ | 万象我師 1236号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

この地上に、雜草というようなものはない、と知ったときは、大きなおどろきだった。そして喜びであつた――。

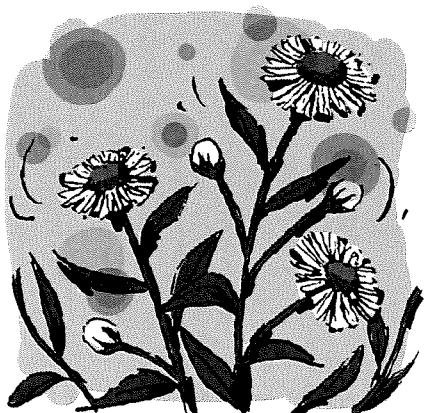
富士山麓に住むようになつてから、ある日、近くの御胎内公園（清宏園）の園長である池谷貞一さんと話しているうち、ふと、私は足もの草に気がついた。

その一本を引きぬいて、「これはなんという名でしようか。いろいろな雜草があるようですが……」とたずねた。池谷さんは、その草を一目みるなり、「これはヒメジヨオノですね。いろいろな山野草がこのあたりには多いですよ」とこたえた。

——山野草！

私はビックとした。そうだ、山野草。山や野に生えているから、まさに山野草なのだ。雜草ではないのだ。

それまで私は、このヒヨロ高いような（三十五、六十センチくらいの）、どこにでも生えている青い草を、つまらぬ雜草だとしか思つてなかつた。しかしそれにはちゃんと名がついていて夏から秋のあいだに、白または淡黄色の美しい花をひらくキク科の植物なのだ。北アメリカ原産で、一八六五年ころ日本に渡来し、今ではどこでも野原や道ばたに生えているという。それは雜草などと呼ぶべきものではないのだ。



## 雜草というものはない

丸山竹秋

そもそも「雜草」とはなんだろう。例によつて辞書をひいてみると、  
——栽培する作物以外の種々の草、役にたたない草。

などと出でている。

栽培するもの以外を雜草というのはわかるけれども、いつたい、この世の中に役に立たない草というものがあるであろうか。名もしれないような草木であつても（もちろんそれらにも名はあるのであるが）生えていなければ、山や野が荒れて水不足の原因になることもある。

——私はそれから雜草といういいかたは、二度と使わないことにした。道ばたの役には立たぬ草などはないのだ。どの葉もどの茎も、みなそぞれぞそばらしい個性をもつたりつばな草なのだ。

このことに気づいてからというもの、私は道を歩くのがとてもたのしくなつた。

多摩川べりなどでは、食用の草をつんでいる婦人もあるということだが、車のゆきかうビル街のまんなかで、だれにもかえりみられることなく、ひつそりと生えている野草は、なんともいえぬあわれさをともなう一方、大自然の活力の一端を示されてしまうようで、心づよくも思われた。

山野にあつては草がたのしく、都会にあつてはまた草をみつける——その楽しみがあふえて、（ここにもわが友がいるぞ）と、ほほえまずにはおられない生活が、私のまわりには広く展開してきた。

（『よろこんで生きる』より）